

## パリ滞在記

(原研) 中川庸雄

1989年10月9日から12月23日までOECD/NEAデータバンクに出張し、欧州共同評価済み核データファイルJEF (Joint Evaluated File) の作成に携わる機会を得た。JEF-2が間もなく完成する予定の時期である。私は、以前に1981年から83年までの2年間、同じくNEAデータバンクに滞在したことがあり、その時は、ちょうどJEF-1の作成時期であり、2年間の滞在中は、その編集作業に追われたものだった。よくよくJEFとは縁があるらしい。

核データに関しては、4つの主要な核データセンターを結ぶ国際協力体制が確立されており、実験データや評価済み核データの交換が行われている。この4センターの1つがOECD/NEAデータバンクであり、日本はその加盟国の1つとなっている。シグマ委員会と原研核データセンターが中心になって作成した日本の評価済み核データライブラリーJENDLは、膨大な中性子入射反応の実験データや理論計算を基にしている。実験データはほとんど4センターネットワークを通じて収集されたデータをNEAデータバンクから入手して使用している。ここは我々にとって非常に重要なセンターである。

NEAデータバンクは、核データおよび原子力関係の計算機コードの収集・配布が従来からの主要な仕事である。前稿「Paris 1987-1990」を書かれた高野誠氏は、コード関係の仕事に従事されている。最近、データバンクは核データと原子力コードの2大伝統的作業の他に廃棄物関係の仕事や、NEAの中の計算作業に関する部分もやらざるを得なくなって来た。人員は、全部で25名程度で長年ほとんど変化が無いのに、仕事は増えている訳で、従来からの仕事の方はマンパワー不足になるのは当然である。今回のように、JEF-2の作成期限が近くなり、急遽手助けに私が呼ばれていくことになるのもそのためである。「コンサルタント」と称する短期助人が時々データバンクを訪れるらしい。

ところで、JEF-2であるが、その全体像は、1988年9月の炉物理国際会議でSalvatores氏とNordborg氏が報告している。それと今回データバンクで聞いた事を総合すると、JEF-1に格納されている約300核種のデータのうち、ベンチマークテストで指摘された主要データの再評価や修正を主に行ってJEF-2とするようだ。つまり、Fe, Cr, Ni, Pb, <sup>238</sup>U, <sup>239</sup>Pu, <sup>241</sup>Puの再評価, <sup>235</sup>Uの一部修正, ENDF/B-VIの標準データの全面的採用、また、<sup>7</sup>Li, <sup>9</sup>Be, <sup>10</sup>B, <sup>11</sup>B, <sup>15</sup>N, <sup>16</sup>O, <sup>23</sup>Na, <sup>27</sup>Al, Siについては、他の新しいデータの採用、FPデータは、Mughabghab等の新しい共鳴パラメータ推奨値および

REAC-ECN-4の放射化断面積データの採用と言った所がJEF-2汎用ファイル改訂の骨子である。FP核種の非弾性散乱断面積には、直接過程を考慮に入れた修正が必要だとGruppelaar氏が主張して来たが、最終的な計算が終らず、未解決のままである。

私の滞在中の12月6日、7日の2日間データバンクでJEF-2の作業グループの会合が開かれ、現状の報告や今後の予定の検討があった。それによると、ベンチマークテスト用のファイルを1990年1月15日までに完成させ、希望者に配布することとした。最終ファイルの編集は、データバンクの仕事であり、実質的にはNordborg氏が担当する。前述の通りの人手不足で、彼の作業量は年々増加しており、そこに、年末、年始が重なり、1月15日に完成に持って行くには並大抵の事ではないと他人事ながら心配になった。評価済みデータファイルの編集は、実に体力を消耗する作業である。毎日毎日自分の室のワークステーションのスクリーンをにらんでいるNordborg氏は核データ関係の事務局も務め、雑用の量もたいへんなものである。

私は、JEF-2の崩壊データファイルの作成を手伝った。基になるデータはENSDFの最新版であり、それをENDFフォーマットへ変換する。JEF-2の崩壊データファイルには約2300核種のデータが収納される。データの変換が必要なのはこれら全てではないが、変換後のデータのcheck、修正作業等を含めると結構と膨大な作業量となり、私の滞在中には完了させることはできなかった。残りは1月中旬に汎用ファイルを完成させたNordborg氏が引き継がざるを得ないかと思うと彼には申し訳ないような気がする。

さて、ここで話題を変えたい。NEAデータバンクはパリの南西20kmのサックレー研究所の一角にある。長期間データバンクで働らく人達はサックレー近くに住んでいる人もいるようだが、日本人は、パリ市内にアパートを借りて自家用車やサックレー研究所のバスで通勤している。私も、以前の2年間の滞在中では、パリ15区はセヌ河近くの古いアパートを借り、家族と住いながら車でデータバンクへ通ったものだった。アパートを出ると北にはエッフェル塔が見えた。歩いて5分位で、エッフェル塔の下のシャンドマルス公園に着き、公園からは北西に大きく左右に羽根を広げた形の雄大なシャイヨ宮がイエナ橋越しに見えた。アパートのすぐ南は、メヌモンパルナス計画で高層ビルが作られているグルネル地区だ。その中心にあるホテル日航も近く、日本人観光客がアパートの側の通りを歩くのが見えた。西にはセヌ河が流れ、川の中にある細長い白鳥の散歩道という中州を幾度となく散歩した。下流端にある自由の女神の像はフランスがアメリカ革命100年を記念して贈ったニューヨークの自由の女神のお礼にアメリカから贈られたものである。夜になると、セヌ河を通る観光船が放つ強力なサーチライトの光が窓を照らし美しかった。

今回は、パリ市の東側に近い13区にアパートを借り、CEAの通勤バスでデータバンクに通った。以前の15区とは地図では反対側になり、雰囲気が大変違う。サックレー研究所のバスは夕方13区の区役所があるイタリア広場まで来る。イタリア広場は、今はなにも無いし観光客もめったに来ないが、広場南東の一带は、工事中で、大きなショッピングセンターが出来るよう

だ。今もその一部はできており、有名なデパート、プランタンが入っている。そのさらに南の方は、高層アパートがどんどんできており、いわゆる「パリ」とは違った一角である。私の頭の内の「パリ」は、クリーム色の壁と、濃いグレーの屋根の6階建てのアパートが整然と並んでいなければならないのだ。

イタリア広場からアパートまではゴブラン通りという名の通りを北に向かって下りてくる感じになる。この通りに面してゴブラン織りの工場がある。御存知の通り、ゴブラン織りはここで作っている有名なタピスリー（タペストリー）の名前で、パリの中の御土産屋で小さいゴブラン織りを買うことができる。この工場は、工場と言っても外壁面に数々の彫刻を飾った堂々とした建物で、美術館の様な感じである。週に3日間（火～木）の午後見学が可能であるが、仕事がある私にはついにその機会を持たず仕舞いだった。

この建物の前を夜1人で歩いてアパートにもどると、いつも「5フラン持っているか？」と聞いてくる若い背の高い男がいた。いつも「Non」と言って通り過ぎていたが、ある時、別の若い男に同じように金を要求され、同じく答えて通り過ぎようとしたら、しつこく付きまとわれたのには困った。この時以来、夜はこの前を通らない事にした。またある時は中年の女性に同じく聞かれた。この時も「Non」と言って通り過ぎようとしたら、後から来たフランス人紳士がサッと財布を出し「いくら欲しいのか？」と聞いていた。一瞬、いつも断り続ける自分のやり方が正しいのかなと考えさせられた。しかし、パリ市内で毎回言われるままに金を出す訳にもいかない。

ついでだから書くと、パリには乞食が多い。私のアパートの近くにも2～3人いて、いつも同じ所に同じ人が立って手を出している。こういう人がパリの中にはかなりいる。大きい町がかかえる問題の1つなのだろう。

今度は1つ良くなった点を1つ。パリ市内の道路は以前に比べて極めて潔いになった。パリ市内には犬が多い。従って道路もよごれるとは良く言われていた事だ。以前の滞在ではパリ市内を歩く時は上を向いて歩くことは極力避けたものだ。しかし、今回は、アパートの付近では、毎朝毎夕緑の服を着た掃除夫を見かけた。散水車で水を道路に強く吹きつけ落葉やごみを洗い流している。ビニール製のほうきで歩道の掃除をしている。完全に安心して歩けるとはまだまだ言い切れないが、とにかく彼等に感謝感謝。パリ市も市の清掃作業にかなりの予算をつぎ込んでいると見た。

ゴブラン通りを北に歩きながら遠くを見ると、丸いドーム型のパンテオンの屋根が見える。カルチェラタンの一角に建つ古典的様式のこの教会の地下にはヴィクトル・ユーゴやルソーを始めとして多くの有名人が葬られている。ガイドブックによるとパンテオンの完成はフランス革命と同じ1789年とのこと。バランスの取れた優雅な感じのこの建物は私の好きな建物の1つである。この教会は聖ジェネヴィエーブ教会というのが正式の名前らしい。聖ジェネヴィエーブはパリ市を守る女神様で、彼女の像は、セーヌ川の、ノートルダム寺院のながめが特にす

ばらしいトールネル橋の南東端にノートルダム寺院を見守る形で立っている。

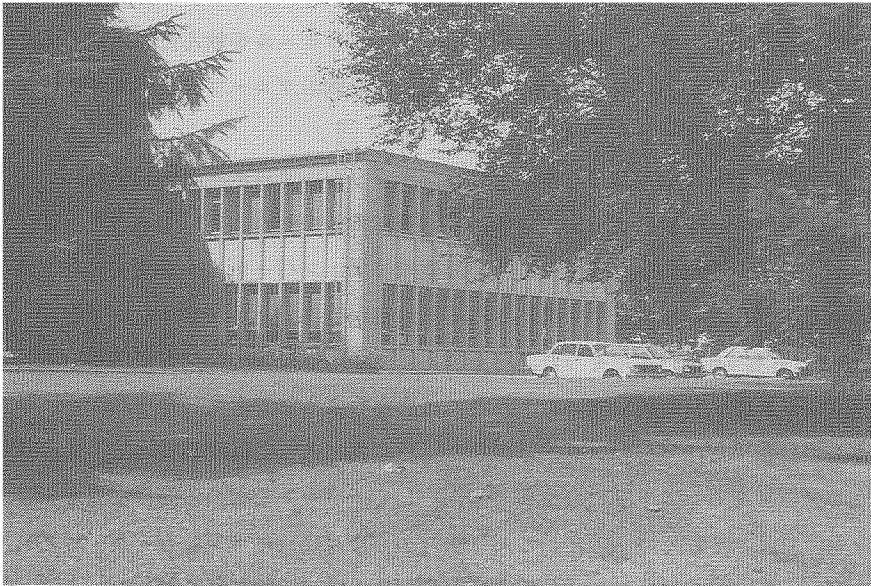
だんだんパリのガイドブックのようになってしまうので有名な建物の紹介は止めるとして、一つ、パンテオンとゴブラン通りの間にある細い道ムフタール街を紹介しよう。ゴブラン通りの北端をさらに北に入っていくと、肉屋、くだ物屋等々が並び車1台分の巾程の細い道に入る。私のアパートからはほんの数分の距離である。さらにゆるやかな登り坂を上って行くとレストランが多くなり、夜遅くまで人々が歩き回っている。特にギリシャ料理のレストランが多いようだ。レストランの中ではピアノの弾き語り等をやっており、一種のシャンソニエの雰囲気のお店が多い。建物は古い物が多く、今にも倒れそうな物も中にはある。この道は、遠くローマ時代、シーザーがパリ（ルティティア）を征服し、「ガリア戦記」を書いた頃、当時の中心地だったシティ島から南へ伸びる主要道路の一つだったのだ。まさかその当時の建物が今に残っている訳ではないが、とにかく古い感じのする道路である。この道路はパンテオンの近くへ来るとデカルト街と名が変る。近くにデカルトが住んだことがあるアパートがあり、入口に記念の板がはめ込まれていた。一度デカルト街のベトナム料理屋さんに入ったことがあった。とても家庭的な雰囲気、料理もおいしかった。最後に店のおばさんに「日本人か？」と質問され「Oui」と答えたら、この店には日本人がたくさん来るんですよと言っていた。多分それは、私と同じガイドブックを持った日本人達だと思った。カルチュラタンは日本人の学生さんもかなり多いらしい。一度、パンテオン近くのカフェに入りビールを飲んだことがあった。夜遅くだったので客が少ない。フッと気付いたら、店にいた別のグループは日本人学生のグループで他はフランス人(?)が2~3人だった。

11月16日は何の日か御存知だろうか？そう、ボジョレーヌーボーの解禁日だ。この日から今年できたボジョレーを飲むことができる。日本では時差のため、8時間もフランスより早くボジョレーヌーボーを飲める。成田の近くで真夜中にウィンパーティーを開くことが毎年報道されるのもこの日だ。今年は夏から秋にかけて暖い日が続く、上等なワインができたと言われる1985年よりもっと良い年だそう。そう言えば私がパリに着いた10月上旬から10月下旬まで毎日天気の良い暖い日が続いていた。9月には真夏のような日もあったとか。とにかく、ワイン無くしては食事が出来ないフランスのこと。私も郷に入っては郷に従えで、サックレー研究所のカンテーンでもレストランの食事でも、そしてアパートで食べる簡単な食事さえ、多少なりとも赤ワインを飲んだものだ。こんな訳だから11月16日にボジョレーヌーボーを飲まないはずがない。この日の昼食は前稿を書かれた高野氏と動燃の油井氏と3人で、本誌33号の52ページで原研の中島豊氏が写真に納まっていたレストラン「タンタン」に行き、早速ボトル1本を飲んだ。比較的甘味があり、香りも良く、確かに今年のワインは美味しい。その後何度もボジョレーヌーボーを飲む機会があったが、どれも美味しかった。参考までにボトル1本の市販価格は約25フラン（600~650円）である。

ところで、フランスに住む人達はあまりボジョレーヌーボーには興味が無いらしい。16日の

午後、ボジョレーの話しをデータバンクのNordborg 氏にしたら、「解禁日は10月中旬か11月かでR氏（サックレー研究所のフランス人）と議論したばかりだ。彼に今日だと伝えねば…」と電話に向った。また別の人も、同じように、10月中にすでに解禁になっていたと思っていた。また別の人は、あれは安いワインだから、わざわざレストランで高い金を出すなんてと軽べつ顔だった。

後日談となるが、日本に帰って来て、酒屋さんの店先でボジョレーヌーボーを見つけた。早速1本買って飲んだが、それはパリで飲んだ物とは全く似ても似つかぬ味だった。フランスが急に遠く感じられた。



OECD/NEAデータバンク

CUVIER DE LA MARTINIÈRE

*Beaujolais Primeur*

APPELLATION BEAUJOLAIS CONTRÔLÉE

1989



1989

12% Vol.

75cl e

Mis en bouteilles à la Propriété  
Cave Coopérative Beaujolaise de Bully (Rhône) France

PRODUCT OF FRANCE

ボジョレーヌーボーのラベル（“Beaujolais Primeur”と“Beaujolais Nouveau”  
は若干異なるとの話しも聞いたが筆者にはその違いがわからない）